

『丁巳蝦夷山川地理取調日誌』に見る安政四年の

オオウバユリ採集とその周辺

About the “Turep” gathering in Ezo 1857 from Matuura Takeshirou's Public Research Diary “Teishitouzaisansenchiritorishirabenitshi”

若林 和夫（北海道民族学会会員）

I はじめに

-これまでの研究とこの論文の目的-

この論文は、松浦武四郎の著作を中心に据えて、『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（以下、丁巳日誌）の天塩一名寄付近と旭川―深川付近の記述に散見されるオオウバユリの処理や食用方法などを、それに関わるアイヌの人々の構成なども含め考察していくものである（以下、敬称略）。

古いものから順にオオウバユリの記録、考察を見ていくと、近世の蝦夷地探検の記録に散見されるのをはじめとして（藤村加藤 1985）、近代においては多くの知識人の記録に散見されている（例えば、矢島 1991）。また研究では林善茂の考察（林 1965 など）以来、知里真志保の分類アイヌ語辞典（知里 1993（1953））での紹介があり、その後は萩中美枝のオオウバユリに関する聞き取りなどからの考察（萩中 1973）が 1972 年の日本民族学会例会での発表で全国的な認知を深めている。

八十年代以降では、研究成果としてまとまった形のもので多くなり、道内短期大学の紀要や博物館で処理を食文化や栄養成分を分析する立場からの研究が行われた（例えば、山本坂西 1983）。聞き取り資料としては、ほぼ道内全域を対象にした渡辺仁らによる全道的な調査のオオウバユリ関連の聞き取りが開始され（渡辺 et al. 1983-99）、処理から食用までの用語等も詳しく扱った藤村久和、加藤篤

美の考察（藤村 加藤 1985）もある。

90 年代以降では蓄積されてきた資料の分析が開始され、渡辺らの調査や十勝で収集した処理事例を加工方法にそって分類し、「地方差」の提示を試みた内田祐一の考察（内田 1995 など）、多少議論が複雑だが、知里真志保の著作での on の扱いや研究者の発言やごく近年の例から処理の多様性について再検討を行った本田優子の考察（本田 2001）等がある。

現在では、2003 年になって新たな展開が見えてきている。光塩女子短期大学の学生であった、塩崎美保が同大助教授石井智美の指導を受けるかたちで、栄養分析を行い他の分析との比較、処理過程での変化の分析を北海道民族学会例会で発表し、2004 年末には『栄養学雑誌』において「資料」として掲載されている（塩崎 石井 2004）。さらに内田は、矢島睿の研究（矢島 1991）によってアイヌとの関係が指摘されていた十勝晩成社の資料を使っただけの考察（内田 2003）でオオウバユリを扱い、聞き取り資料から文献の方向への拡大を垣間見せている。

全体を見ていくと、ごく最近のものを除き従来の研究は、近代における聞き取り資料や記録に頼る考察が多く、明治以降の処理の形式や食用に対する意識を研究することに傾注してきたといえる。つまり原因ははっきりしないものの、「過去」については批判もなくうやむやなまま、という姿勢を間接的に容認して来た。

この事実は問題と認識されるべきだろう。

過去に対する詳細な論証を留保し、近現代から現状の情報を「過去にあてがえる可能性」を間接的に示唆し、実証的な論証なしの近代資料の過去への適用を許す状況にある。かなり遅くはあるが、当事者などの興味が高い分野の必須作業として引用されるのみであった資料（史料）を再調査し、本田が説話について行ったように「過去」の植物利用について検討する必要がある（本田 2001）。

そこで「過去」の食用植物利用を具体的に考察することを目的に、その第一歩として幕末期の松浦武四郎（以下、武四郎）の著作を検討する。表題にあるように、今回は幕府雇となった安政期の日誌『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』（以下、『戊午日誌』）や『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（以下、『丁巳日誌』）の方が総合的には優れているため（秋葉 1985）こちらを使用し、本論ではオオウバユリについて多くの記述を集められた『丁巳日誌』を中心史料とする。

なお各アイヌの名称表記、使用漢字、地名については秋葉氏の翻刻に従い、「オオウバユリ」の名称については、本文の中ではオオウバユリを本論での表記とし、それ以外の引用については、引用文献の表記に従って名称の表記を行う。また、読みやすさの関係から引用史料本文では、組み文字となっている年齢を本文と同様の文字の大きさにしている。また2文字以上の繰り返しの場合は繰り返し記号ではなく、文字を明記している。また、ここで扱われる内容は、すでに北海道民族学会の例会において口頭発表を行っている。

II 『丁巳日誌』 オオウバユリ

関連記述

1 著者と『日誌』の紹介

では、各個の史料について整理をしていくとして、まず『丁巳日誌』と『戊午日誌』（双方を含む場合は、『日誌』とする。）についてと著者の基礎的な情報の確認を行う。

詳しい生い立ちは松浦武四郎研究会の会誌に掲載されるなどしているので割愛するが、書き手である武四郎は、伊勢のうち現在の三重県三雲町小野江の出身で、蝦夷地探検の以前には九州や長崎など日本国内を放浪し、日本の未来を憂えた尊皇攘夷の志士であった。晩年は、明治政府の雇となり北海道やその地名の名付け親となるも辞職し、1885年に没している。

彼の書いた『日誌』は蝦夷地渡航の内、五回目と六回目にあたる。これ以前には『蝦夷日誌』の際に三回ほど、『廻浦日記』の際には一回の渡航をしている。渡航に際しては北海道のみではなく、サハリンにも渡っている。また『日誌』の安政期に調査に入った時には、博識を買われ幕府雇となっており、寛政期に続く幕末期における蝦夷地直轄前後の詳細な調査に従事している（高倉 1978、高木 1984 など）。

さらに日誌類には、一般に認識されている様に各々機能分担が見られ、地理的には『蝦夷日誌』は基礎文献や基礎的情報の集成、『廻浦日記』は渡島や沿岸部全体の現地情報の集成、『丁巳日誌』は『廻浦日記』時に把握できなかった天塩上流から名寄周辺の情報の集成、『戊午日誌』は『廻浦日記』時に把握できなかった日高上流域、十勝沿岸の情報、釧路、根室、太平洋岸上流域の情報の集成となっている。また植物記述については、調査地域や時期の差もあるが、『丁巳日誌』では野生植物中心、『戊午日誌』では栽培植物中心となっている。

なかでもオオウバユリに関する記述は、表1を見てもわかるように『日誌』に集中し、『日誌』の中で食用にされた植物の中では一番多い。『丁巳日誌』には、関わっている当事者の確認できるものだけで31件と、地名などの説明で関わった当事者が不明なもの5件がある。同様に、『戊午日誌』にも前者、後者共に四件を確認している。また、その他にも、『蝦夷山海名産図会』（松浦 秋葉 1997）にオオウバユリに関して、処理方法を含めた紹介を行う一文が存在する¹。

表1 『丁巳日誌』全体の記述箇所

丁巳日誌			
	記述箇所	時期	場所
1	三_4	1857年6月10日	フル
2	四_44	1857年6月14日	ウエンモシリ
3	五_5	1857年6月15日	ヘツハラ
4	六_17	1857年6月21日	フシコベ、ツ
5	六_29	1857年6月22日	ホロソウ (ベツチウシ)
6	六_34	1857年6月24日	ホンメン
7	七_5	1857年6月25日	アサカラ
8	七_9	1857年6月25日	ウエンベツフト
9	七_32	1857年6月29日	アイベツ
10	七_46	1857年6月30日	チユクベツフト大番屋
11	七_51	1857年7月1日	ヘツハラ
12	八_31	1857年7月6日	クウカルウシ
13	九_30	1857年7月7日	トツク
14	十_67	1857年7月28日	テシホ運上屋
15	十一_17	1857年7月29日	ヲ、チヲウヌ
16	十一_43	1857年8月1日	ツウヨイ
17	十一_48	1857年8月1日	トンベツホ
18	十二_7	1857年8月3日	ヲクルマトマナイ
19	十二_27	1857年8月4日	フシコベツ (ナヨロ)
20	十二_37	1857年8月5日	チノミ
21	十二_40	1857年8月5日	ヌタベト
22	十二_42	1857年8月5日	トウシチヤシ
23	十二_48	1857年8月6日	サンルベシベ
24	十二_49	1857年8月7日	チノミ
25	十二_51	1857年8月7日	ナイフト (ナヨロ)
26	十三_31	1857年8月12日	ウツ
27	十三_32	1857年8月12日	フウレフ
28	十三_33	1857年8月13日	ヲクルマトマナイ
29	十三_35	1857年8月14日	ヲニサツへ (トンベツホ)
30	十五_11	1857年8月24日	石狩運上屋
31	十六_2	1857年8月27日	タツコブ

丁巳日誌			
	記述箇所	時期	場所
1	五_31	1857年6月17日	トレフサラ子
2	五_42	1857年6月17日	サルブツ
3	六_8	1857年6月19日	二股
4	八_15	1857年7月3日	クウカルウシ
5	二二_6	1857年10月3日	ルエフルウシナイ

上部の表が武四郎の体験記述、下部は伝聞記述である

表2 『戊午日誌』全体の記述箇所

戊午日誌			
	記述箇所	時期	場所
1	五_3	1858年4月22日	ベツチウシ
2	七_29	1858年5月2日	マクンベツチヤロ
3	二十_35	1858年6月15日	シレトコ岳
4	四七_15	1858年8月22日	アシリコタン

戊午日誌			
	記述箇所	時期	場所
1	五_3	1858年4月23日	シキウシナイ
2	三八_15	1858年8月7日	トレフシコツ
3	三八_16	1858年8月7日	モヘシユイ
4	三八_34	1858年7月1日	ボロカモベツ

表1のように、上部が体験記述、下部が伝聞記述を示す

表は秋葉実翻刻『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』2001[1982]『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』1985北海道出版企画センターより編集、作成

これらの記述のうち、「採集、処理、食用」の3点に直接関わるものは、全体で22件あり、その他は贈答品として武四郎に提供されたもの、当事者家庭の食べ物のない様子を形容するときに「例え」として出てくるものである。

2 採集に関する記述

では、考察を行う前に、中心となる6件の史料を見ていく。

まず初めに見えるのは、「第七卷再篤石狩日誌巻の五」の安政四年閏五月四日、陽暦で6月25日のウエンヘツフトでの記述の中である。

七_9

ウエンヘツフト

(中略)

扱、此家えより見るに、当時ヲテコマと夫婦に成居る由にてシユケリ、と云六一才盲目の婆同居し居たり。其夜は此辺りにて泊り、シリヘツの川筋の事を聞かまほしく思ひて、ヲテコマを尋しかど、此頃山えトレフを堀に行きたりとて居ざるに、大に望を失したりけり。

(中略)

扱此家にて止宿致候はゞやと一同休息したるに、又一同エトマを煮て出し、いとねんごろに世話致し呉たりけり。其夜此処にむかし有し家数の事等聞に、向方なるバンクル爺こそ能覚居る由聞に附、同人の申し口を記し置に、先其死絶し家は数多あれども、当時存在の物と云は、当時トクヒラ帳にて有ラツコエキ五十六才夫婦なるが、此ラツコエキは浜え下げ有、妻エヘコレヌ六十四才と云は此後に小き家を作り居る由なるが、山え是もトレフ取に行、此頃は不レ居由申たり。

(秋葉実翻刻『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』「第七卷再篙石狩日誌巻の五」より)

その名称の通り、現在の宇園別河口付近であるようだ。ここでは、2つの例が見られる。下線部を見ていただくと分かるように、「此頃山えトレフを堀に行きたりとて居ざるに」や「妻エヘコレヌ六十四才と云は此後に小き家を作り居る由なるが、山え是もトレフ取に行、此頃は不レ居由申たり」という点から、採集を行なっていることが伺われる。

次に、「第七卷再篙石狩日誌巻の五」同年閏五月八日、陽暦で6月29日のアイベツでの記述である。

七_32

アイベツ

の川口を見当たり。然るに、思ふに不レ違小き丸木船一艘繋ぎ有しが、其辺土人の居る様にも無りけり。左候やまたシリアイノは樺をもち行、彼茅原え火を燃し著たるに、川原にて其火燃上り、纔時に天をも焦す程になりしかば、一同の土人等申候に、左こそ是にて此処え来り居る土人は帰り来るべしと申て、飯等仕懸、鹿・狐等をまた糞ものとして喰する間に、彼方の岸にて人声致し、此方をぞ呼たるに答ふるや否、右の丸木を棹さし来りけり。然るに是はヒ、フトのイチヤンコエキと云爺と、カマテと云婆の由也けるが、

十日計も前よりトレフを取に此処え上り居て、此アイベツの川すじ十丁計も奥に丸小屋を懸て居るよし申、此火が見え候に附、余り不審の儘出来りしとて笑いたりけり。扱其より飯等を与え、明日は此丸木を借りまほしく談じけるに、早々承知致し呉れけるまゝ、一同安堵をぞ致したりけり。

(同上「第七卷再篙石狩日誌巻の五」より)

ここでは多少、ウエンヘツフトとは違って「此アイベツの川すじ十丁計も奥に丸小屋を懸て居る」といった情報も含まれている。また、二人の出身から考えるに「ヒ、フト」²からアイベツに移動し、「十日計も前よりトレフを取に此処え上り居て」ということから、「丸小屋」を作つて宿泊しながらの採集であるようだ(この点については、IIIで扱う)。

3番目は「第十卷天之穂日誌 巻の一」同年六月八日、陽暦で7月28日テシオ運上屋での記述である。

三十_67

テシホ運上屋

えぞ着しけるに、去年ソウヤまで召連たるヲリトウといへる土人も来り、ヤンカラフツテをぞ致すに、又爰にても当所の極難(渋)の者え造米三俵ヅ、被レ下候よし聞侍りけるが、其由を聞に、サケ子カ子廿八才と云もの、母テケトナシ六十一才といへるは、五六年前より病気の由なるが、其俵のテコロカツテ廿八才と云と、エヌンベと云自分の第四十八才と、其エヌンベの子エナラムシ十三才と家内五人にて暮し居候処、其嫁も病に付き、エヌンベも病にて譬に成居るによつて、只此サケ子カ子一人にて此五人を養育致し、我が着たる衣類をば夜は母や叔父に着せて、寒さをば凌がせ候よしなりとかや。然るに運上屋よりは御通行の(とか)または昆布漁のと日々取上遣はるゝによつて、其病身なる婆と十三になる子と、

此頃も三十日余山え入、トレフを堀に上り居りしとかや。

(同上「第十卷天之穂日誌 卷の一」より)

「とかや」といった結びから伝聞的な意味合いが強い文章である。採集に関する記述の「此頃も三十日余山え入、トレフを堀に上り居りしとかや」では、長期間の採集のように読み取れる。そしてこれまでは、多くても2人で採集を行っていたが、3人で採集へ行っている(採集者については、3で扱う)。

4番目。多少時間があいて「第十二卷天之穂日誌 卷の三」同年六月十四日、陽暦で8月3日のヲクルマトマナイの記述である。

十二_7

ヲクルマトマナイ

(中略)

然るに其家主は両眼盲して有しが故に其故を問ふに、五六年前より盲たり。然る処当春トレフを取に妻テケモンケ山え行、また片目を木の枝にて突て如レ此目爛れたりと云しが、未だ癒しとも不レ見是も片目に成居たり。

(同上「第十二卷天之穂日誌 卷の三」より)

ここは、現在でいうところの恩根内周辺の小車付近ようである。ここの記述は、8月3日での採集ではなく、下線部のように「当春トレフを取に妻テケモンケ山え行」ということで、時期の特定はできないものの、記述された時点よりは、前に採集を行っているように読み取る事が出来る。

5番目は、四番目と同じ「第十二卷天之穂日誌 卷の三」同年六月十六日、陽暦で8月5日のヌタバトの記述である。

十二_40

ヌタバト

此処も地味少し高くして平地也。むかしより人家有りしとかや。右の方小川の岸に二軒有。

家主はイシヨマ四十才、妻ハルラン五十五才、甥アマ、十七才と居るよし帳面に有り、妻ハルランも此頃上川えトレフ取に行しとて、家は丸明也。また、其隣なるケシユラン四十八才久敷病気によつて、浜え久しく下らざるとかや。妻サケウン四十六才のホントメ四才と三人、是もサンルベシベえトレフ取に行、此家も丸明に成候。

(同上「第十二卷天之穂日誌 卷の三」より)

チノミーサンルベシベ間の移動の中で出てくる地名である。ごくチノミに近い。ここでもウエンヘツフトの例と同様に、2軒共に採集にいつている。読んでみると分かるように、この記述個所では、2件ともに「丸明」となっているのに、細かに記録がされている(次節で細かく扱う)。

最後は5番目と同巻「第十二卷天之穂日誌 卷の三」同年六月十六日、陽暦で8月5日のトウシチャシである。

十二_42

トウシチャシ

右の方枝川のごとく曲がりて入込だり。此処も少し高き地也。其下の流れ、鮭卵をなす処のよしにて、漁業の弁理なるが故に、むかしより土人等家居致せし由也。然るに今は一軒ならではなしと。其家主は当所の小使エヘカウシ六十才、妻ヲシヨロクンテ四十一才住する由なるが、此者には倅エコレカンと云て、当年十一才に成相応の者も有に、是も一切山えは帰さず、其嫁子ンカ拾五才と云と共に浜にて遣ひ有る由。よつて山には其妹ケニサイ十六才と云とシ子シト十一才と、其妹タツタツ四才の三人の子供と共に山に居候。エヘカウシは此頃病気の由にて家に居たりしが、妻と子供等はトレフ取に行て留主なりと聞侍りける。

(同上「第十二卷天之穂日誌 卷の三」

表3. 『丁巳日誌』と『戊午日誌』の採集記述

丁巳日誌						
記述箇所	時期（西暦）	場所	解説	採集地	採集時期と採集者	
七_9	1857年6月25日	ウエンヘツフト	シユケリハ、ハ ンクル爺	不明	不明	無
					記述と同時 期	△ヲテコマ五十九才
					不明	無
					記述と同時 期	○エヘコレヌ六十五才
七_32	1857年6月29日	アイベツ※	武四郎自らの観 察（採集関連は イチヤンコエ キ、カマテ）	アイベツ上 流	記述と同時 期	△イチヤンコエキ爺六十 才、○カテマ婆五十九才
				不明	不明	無
						無
十_67	1857年7月28日	テンホ運上屋	ヲリトウ	不明	記述と同時 期	○テケトナシ六十二才、? サケ子カ子二十九才、?エ ナオムシ十四才
十二_7	1857年8月3日	ヲクルマトマナイ	エカシテカニ	不明	当春	○テケモンケ三十九才
十二_40	1857年8月5日	ヌタベト	ラフニ	サンルベシ ベ	記述と同時 期	○ハルラン五十六才
						△ケシユラン四十九才、○ サケウン四十七才、▲ホン トメ四才
十二_42	1857年8月5日	トウシチャシ	エヘカウシ			○ヲシヨロクンテ四十 一才、●ケニサイ十六才、● シ子シト十一才、●タツタ ツ四才
戊午日誌						
二十_35	1858年6月5日	シレトコ岳	武四郎自らの観 察	不明	不明	不明

アイベツでは、採集途上のイチヤンコエキ夫婦と出会っており、人別については七_37 ヒハの情
報を使用した。○女性、△男性、?は不明、双方黒は子供

より)

ヌタベトに比ベトウシチャシのほうがチノ
ミに近い。読んでいくと、「妻と子供等は」
ということなので、妻ヲシヨロクンテ、子の

ケニサイとシ子シトとタツタツの4人が採集
へ行っていることとなる。場所については、
不明である。

以上で、『丁巳日誌』に含まれる採集関連に

家屋数と人名	
四軒十六人	妻アベヤンケ二十八才、倅ホツケ十才、弟五才、妹テキヒシテ十一才、イソチウ弟モノクテ二十六才
	家主ヲテコマ五十九才、妻シユケリ、六十二才、娘チキランケ三十三才（六十八九？）、男子シイヌシ十一才、シユツコウモ八九才
	ハングル爺六十二才、妻シキタマ四十三才
	家主エナオアニ三十七才、母アチヤサケ婆六十七才、妹ヲヤエケフ十八才
	妻エヘコレヌ六十五才
三軒十一人	イチャンコエキ爺六十一才、カテマ婆五十九才、アリトカム十八才、イニシヲ九才
	チセフリカ二十七才、子供三人
	家主サリキシユマ婆、ラツコエキ爺五十一才、妻エヘコレヌヤ六十五才
一軒（他の家については不明）	サケ子カ子廿九才、母テケトナシ六十二才、テコロカツテ二十九才、エヌンベ四十八才、エヌンベ子エナオムシ十四才
一軒八人	エカシテカニ六十九才、妻テケモンケ三十九才、倅トロンヌ十三才、イカシロン八？才、カニヒ六？才、アヨホシ、シベサレ、チエベカリ
二軒四人	妻ハルラン五十六才
	家主ケシユラン四十九才、妻サケウン四十七才、三男ホントメ四才
一軒四人	小使エヘカウシ六十一才、ヲシヨロクンテ四十二才、娘ケニサイ十七才、シ子シト十二才、タツタツ四才
二軒六人	カラリケ六十九才、エタンケシユム七十才、シヨノシケ、ノホリコロ
	ヌクフシ三十五才、女子一人

つてはすべての記述を紹介した。こうして読んでみると、多少考察に入る前に、整理しておくべき事項があるので、それを次節以降で整理しておき、章を改めて考察に入っていく。

2 各記述を語っているのは誰か

さて、まずそれぞれの記述を整理する前に、「丸明」と記述されるのにもかかわらず、情報が書き込まれている場合もあるので、混乱を避けるため日誌上で各個所の内容が誰によ

って語られたものかを、はっきりとさせておこう。

ウエンヘツフトについては、1つ目はヲテコマが採集に行っており、それをヲテコマの妻となっているシユケリ、がその旨伝えたのを書き記していると考えられる。2つ目は、記された内容からエヘコレヌが採集に行っているのをバンクル爺から聞き書いていると考えられる。アイベツについては、単純に、アイベツの上に採集に来ていたイチャンコエキという爺とカテマという婆の2人の「ヒ、フト」からきた老人に、直接聞いたものを書いている。

テシオ運上屋では多少考える余地はあるものの、ヲリトウからと考えられる。ヲクルマトマナイでは、中略部分に人名があるためはっきりしていないが、家主であるエカシテカニが語っているのを書いている。そして、1つ飛ばして、トウシチヤシである。ここは、「当所の乙名」であるエヘカウシが家にいるようなので、彼の発言であると考えられる。

さて、一番の問題がヌタベトである。読んでみると分かるように、伝聞的な書き方で、しかも2つの家しか存在しておらず両家共に「丸明」であるのに、細かな情報が記載されている。ここで注意を要するのは、「其人別一々ワムに聞記して行に」と引用では切れてしまっているが、人別については説明した人間が明記されている、と、日誌自体はすべてを体験した上で書かれている点である。実は、「ヌタヘトのケシユラン夫婦とイソマの妻とエヘカウシの妻と子供四人来り居たり」と上流のサンルベシベで「丸明」となっていた家の人々と出会い、その日はそこで野宿している。つまり、ヌタベトでの記述は、実見した情報と秋葉解では注で同行者ラフニのこととしているワムという同行者がヌタベトで聞かせたこととを合せての判断の下に書かれている。

だが一方で、ワムという人名が同行者には存在しないため、注でラフニとされているのが本当かどうか検証する必要がある。そこで以下、何者かを特定していく。

まず同行者を特定するため、『丁巳日誌』を下って探していくと、チノミの記述に同行者を交代する記述を見出すことができる。チノミに到着すると、まず「トセツ、アエリシテンカ明日は休息する様、イコレにも明日よりシヘツ見分済みまで休息を致させ」³とあることから、これ以降の十七日については、これまで同行してきたトセツ、アエリシテンカ、イコレに休息をあたえている。そして、「明日左候につきラフニ、トキコサン、エシヨカンテの三人にて上る由申しぬ。」⁴と、チノミの出身者ラフニを加え⁵、トキコサン、エシヨカンテの三人を後の行程に連れていく旨、武四郎が伝えている。

ここでアエリシテリンカ、トセツ、エコレが同道していたのを交替するのは、もちろんイコレ、エコレなどと書かれるイコレフがチノミより下流のチルスシに家があり⁶、下流の周辺の地理や事情に詳しい人間であるからと考えられる。つまり、従来いわれるように、行き先の地理に詳しい近隣のことを、交替に際してその都度連れて行くことが見てとれる。

その点からヌタベトにかかる行程に同行している3人の出身を見ていくと、エシヨカンテについては、ナヨロのフシコベツに住んでおり⁷、前述の如くラフニはチノミに居住しているし、トキコサンは下流のベンケキユシビタラ出身である⁸。3人とも出身が近隣であり、周辺地域について解説できる能力を持っていることが伺われる。よってヌタベトについては、3人のいずれかによるものといってもよいが、出身の地理的な近さを考えるに、すぐ下のチノミの出身であるラフニの発言である可能性が強い。

これで一応のところ、各記事が誰によって語られているかがはっきりしたところで、採集を行なっている人々（以下、採集者）についてみていくとし、次節へ移る。

3 誰が採集を行なっているか

一部については前節で触れたが、採集者について見ていく。年齢と性別については表3にまとめてあるので、以下の文章と見比べな

がら、見ていただけるとありがたい。

ウエンヘツフトでは、初めの例では「ヲテコマを尋しかど、此頃山えトレフを堀に行き」とあるように男性のヲテコマが採集に行き、二つ目の例では、「妻エヘコレヌ六十四才と云は此後に小き家を作り居る由なるが、山え是もトレフ取に行」ということから、女性のエヘコレヌが採集を行なっている。アイベツでは「ヒ、フトのイチャンコエキと云爺と、カマテと云婆の由也けるが、十日計も前よりトレフを取に此処え上り居て」という点から、イチャンコエキとカテマという老人が採取を行なっている。テシホ運上屋では、「其病身なる婆と十三になる子と、此頃も三十日余山え入、トレフを堀に上り居りしとかや」とあることから、前の文脈から、サケ子カ子とテケトナシ、エナオムシの三人によって行なわれている。

ヲクルマトマナイでは、「処当春トレフを取に妻テケモンケ山え行」とあるように、妻テケモンケが採集を行なっている。ヌタバトでは、初めの例は「家主はイシヨマ四十才、妻ハルラン五十五才、甥アマ、十七才と居るよし帳面に有り、妻ハルランも此頃上川えトレフ取に行」とあるように妻ハルランが行なっている。次の例は「妻サケウン四十六才のホントメ四才と三人、是もサンルベシベえトレフ取に行、此家も丸明に成候」とあることから、ケシユランと妻サケウン、ホントメの一家で採取に行っている。トウシチャシは、「エヘカウシは此頃病気の由にて家に居たりしが、妻と子供等はトレフ取に行て留主なりと聞侍りける。」とあることから、妻ヲシヨロクンテとケニサイ、シ子シト、タツタツの4人が採集を行なっている。

採集を行なっている家庭については以上のように読み取ることができる。それぞれの年齢を見てみると、イチャンコエキとカマテについては爺や婆とされ、ここでは不明である。そこで第七巻三十七丁の「ヒ、」を見てみると、「此家主は船を借り来りしイチャンコエキ六十才、妻カマ、ツテ五十三才に三男アリトカム十八才、孫イニシヲ九才と四人住せ

り」⁹とあり、イチャンコエキについては、六十才であるとわかる。カマテについては、その妻とされるカマ、ツテがそれに当たると考えられる。記述に従うと五十八才となる。

これで、全員の年齢がはっきりと分かる。しかし、これらの人別は武四郎が「凡例」で述べているように、「何れも其一数を加えて」みる必要がある。つまり武四郎が使用している人別が前年のものであるためだが、実際に加えていくと、60歳台は、エヘコレヌ六十四才が六十五となり、イチャンコエキ六十才は六十一才で2人。50歳台がヲテコマ五十八才は五十九才で、カマテ五十八才も五十九、ハルラン五十五才は五十六才で、合計3人である。

40歳代では、ケシユラン四十八才は四十九才、サケウン四十六才は四十七才、ヲシヨロクンテ四十一才は四十二歳で3人である。30歳台は、テケモンケ三十八が三十九となり、1人である。そして十歳台はケニサイ十六才は十七才、シ子シト十一才は十二才となり2人のみである。また9歳までの幼年者は、ホントメ四才、タツタツ四才つまり五才が2人となる。合計で12人である。

個人差があるので判断しづらいが、イチャンコエキとカマテに孫がおり、武四郎によって爺と婆と形容されることを考えると、50代後半以上は高齢者と考えてよいようである。その点から、高齢者が5人と約半分をしめ、それ以下で大人と呼べる人数では、総て女性4人おり、子供は、5人いることがわかる。

男女どちらが多いかを見ていくと、はっきりと女性と分かるのはエヘコレヌ、カマテ、テケトナシ、テケモンケ、ハルラン、サケウンの6人である¹⁰。

さらにエヘコレヌ以外の5人に関しては、ほとんどが自らの子供であるが何らかの理由で、扶養すべき子供がいる人々である。例を二つ挙げると、カマテは、「ヒ、」の記述を見ると、「三男アリトカム十八才、孫イニシヲ九才」の2人がいる。サケウンは、「ケシユラン四十八才久敷病気によつて、浜え久しく下らざるとかや。妻サケウン四十六才のホ

ントメ四才と三人、是もサンルベシベエトレフ取に行」とある事から、ホントメという幼い子をかかえている。

男性とはっきりとわかるものでは、ヲテコマ、イチャンコエキ、ケシユラン3名である。いずれも男性が採集に参加している事に間違いはないが、いずれも何らかの理由をかかえていることが読み取れる。まずヲテコマは「シユケリ、と云六十一才盲目の婆同居し居たり」とあることから、目の見えないシユケリ、が採集を行なうわけには行かないと考えられる。また、イチャンコエキについても、「三男アリトカム十八才、孫イニシヲ九才と四人住せり」という扶養者がいるために、採集に妻と二人で行く必要があると考えられる。ケシユランは、「ケシユラン四十八才久敷病気によつて、浜え久しく下らざるとかや。」¹¹という点で採集に行くことが出来るのと、妻サケウンが子供ホントメをかかえているため、同行していると考えられる。

各記述から人数的に採集を行なう「人」についてみてきた。松浦武四郎自身が文中で、植物採集なども含めて指摘を行っているように¹²、高齢者やそれに近い年齢層で女性を中心とし、子供を連れて行くこともあるということが出来る。これは労働が可能な者や年齢的に中間に当る者や男性、女性が魚場労働に出ているためであろう。武四郎のいう「山」ににいるという点で、労働を引退または、病などで不可能である老年男性も同行する場合があるようだ。また人数については、1人といった規模のものから、家族3人でとさまざまである。これについては、各家で実際に生活している人数とも関係しているようである。

III オオウバユリの採集と処理

1 採集場所と期間

採集場所に関しては、全般にわたって「此頃山えトレフを堀に行きたり」とか「当春トレフを取に妻テケモンケ山え行」といったふうに、象徴的に「山」といった記述がなされ

ている。そのなかで、はっきりと地名が出てくるのは、アイベツの「ヒ、フトのイチャンコエキと云爺と、カマテと云婆の由也けるが、十日計も前よりトレフを取に此処え上り居て、此アイベツの川すじ十丁計も奥に丸小屋を懸て居るよし申」という例と、ヌタベトの「妻サケウン四十六才のホントメ四才と三人、是もサンルベシベエトレフ取に行、此家も丸明に成候」という例の2例のみである。

また、採集場所については、はっきりとした当事者が確認できないものの、第六巻「再篤石狩日誌」巻の四の八丁五月二十八日（陽暦6月19日）や次の年の『戊午日誌』第五巻「東部登加知留宇知誌」参の十五丁三月十日（陽暦4月23日）に、以下のような記述が見られる。

六_8

二股

(中略)

この処にて夜に入候間、川の左の方え止宿す。むかし此処には土人等多く居候よし。今は一軒もなし凡大番屋より七八里と思わるなり。此辺トレフが多き故に、チクヘツ川すじの婆等トレフ取に來りて滞留する由にて、丸小屋の跡有。

戊午五_8

シキウシナイ

此処土人止宿せし跡有。其故を聞に水清く薪多き処有しと。蕎麦葉貝母多きよし。チクベツ、ベ、ツの老婆等皆此処えトレフを掘りに來り止宿するが故に此名有りと。

年が違うものの比較的近隣の2つの地域だが、「二股」の部分については、クウチンコロ、シリコツ子、ハリキラ、イナヲアニの4人が同道しており、近隣のフシコベ、ツに、クウチンコロの家があり乙名でもあることから、クウチンコロが語ったものかと思われる¹²。「シキウシナイ」では、年長者であるイソテク、クウチンコロが解説したものと考えられる。

4 例ともに共通しているのは、それぞれがすでにかなり山よりの地理条件であるのに、「十丁計も奥に丸小屋を懸て居る」、「サンルベシベエトレフ取りに行き」、「チクヘツ川すじの婆等トレフ取に來りて」や「チクベツ、ベハツの老婆等皆此処えトレフを掘りに來り止宿するが故に此名有り」というように、さらに山奥へ進んで採集を行なっている。

採集期間については、アイベツとヲクルマトマナイの二例のみははっきりしている。アイベツでは「十日計も前よりトレフを取に此処え上り居て」というふうに、10日程度前から採集を行っている。後の記述から、翌八日にヒハフトへ戻っているようである。次にヲクルマトマナイの「其病身なる婆と十三になる子と、此頃も三十日余山え入、トレフを堀に上り居りしとかや。」と、「三十日余」といった記述がなされている。さらに、二股では「トレフ取に來りて滞留する由にて、丸小屋の跡有」やシキウシナイだと「此処えトレフを掘りに來り止宿する」という記述も見られる。

一方これらの記述には問題がある。前の2つ目の例には期間に多少の誇張も感じられ、後の2つ目の例では、肝心のチクヘツやベハツに関連した記述がない。いかにクウチンコロやイソクテの情報としても、額面通り読むわけにはいかない。としても「丸小屋」がいくつも見られ、それがオオウバユリの採集と関連付けて語られることや採集に際して期間の長さが強調されることを考慮するのは過ちではないだろう。つまり、期間を限定することはできないものの、時には採取地での宿泊が必要になるほど「長期」にわたっての採集を行なっているといえる。

では、次節で採集時期に関して見て行こう。

2 採集時期の同定

これまででは、各個所の記述にしたがって進めてきたが、採集時期については、多少方法を変えて考えてみるでしょう。

各記述自体には、日付情報は含まれていな

いのは見ておわかりだろう。だが、日誌形式で記録されているものなので、一々言及してきたように現代の暦ではないものの、日が変わると文章は段をかえて記入されている¹³。それを、現代の暦に直して、日付の特定を試みたのである。そこで、現代の暦に直したものを、他の項目と共に、一覧で示したのが表3である。ここでは、『戊午日誌』には、はっきりとした採取例がないので『丁巳日誌』のみを使っている。6月末のものが2例、7月末のものが1例、8月初めのものが3例であることがわかる。

しかし、6月末から7月末までの記述がないことが読み取れる点について触れておく。具体的に巻数を見てみると第七巻「再篤石狩日誌 卷の五」の三十二丁以降から、第八巻「再篤石狩日誌 卷の六」、第九巻「再篤石狩日誌 卷の七」、第十巻「天之穂日誌 卷の一」六十七丁まで、オオウバユリの採集に関する記述はなく、他の記述を含めても第九巻「再篤石狩日誌 卷の七」のハンケホロナイの記述から、十巻末までではない。そのため日本海岸線近くに住むアイヌの人々が採集を行なっているかどうかはわからない。

一方で、この間オオウバユリが採集できないかということもそうでもないだろう。まず、この後に記述が見られ、テシオ運上屋で採集の記述がある以上、これらの地域でも採集は可能であると考えられる。つまり、『丁巳日誌』で確認できる地域では、6月後半から一部史料が欠けているものの、7月を通して8月前半まで採集が行なわれていると考えられる。

では、こうしてとられたものは、どう処理されたについても見ていこう。

3 処理方法

処理に関する記述は、『丁巳日誌』に1例のみ見られる。まずそれを見てみることにして、その後に考察していこう。

ではまず、長い引用となるが十二卷二十七丁名寄川筋のフシコベツの記述である。

十二_27

フシコベツ

右の方より来る。此川は古の川のよし。過て急流を一同に陸え上り、船を押し上げて、川二股に成たり。是より

(ナヨロの) 本川が左りの方なるを、右の方マクンベツえ船を押し入ぬ。いよいよ此辺柳の木多く、いかんとも致しがたきが、辛うじて行や、水主共は舷を櫂にて打ちならすや左りの岸より白髪の人髯の胸より腹までも掩蔽けるが、太き枝突張て出迎えぬ今日の道凡六里半位。

上陸して家へ入るや、六尺に二間計にて其建方石かり上川辺とは大いに異り、其工は虻蠖を防るゝのみの建方にて、家内常に少しづゝ火を燃し烟を籠らす工風を致せしもの也。其窓と云も纔一尺計づゝ、窓と申ものも一尺計にて、只烟を貯ふるを宜とす。家にはトレフを多く取て製し居たり。此家主の事を聞に、名はアヘルイカ七十七才と云、近頃までナヨロの小使を謹居りしが、熊に撲られ腰の骨を折てより働が出来ぬ様に成て退役し、今は山に居るよし。

『丁巳日誌』を通してこの1例のみであるので、若干武四郎の別の著作も交えて見ていくと、まず、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』二十卷「東部志礼登古日誌」知床での六月十六日の記録では、以下のような例が見られる。二十_35

シレットコ岳

(中略)

是家主は

当所カラリケ六十九才の家なりと。妻はエタンケシユム七十才、其娘シヨノシケに髯の倅ノホリコロと四人にて暮し、此家にヲタルシといへる者有るよしなるが、是は雇いに遣れて居

ず。また其隣

家主ヘシカ三十二才、妻はヘテツケ二七、八才、姉ヌユクフシ卅五、六才、女子一人等。是もヘシカ夫婦は雇に出て家に不レ居よし。また其隣

家主トツハイ二十七才、妻ハケチナ二十

三才、二男ヲタヌム十七八才、三人にて暮すに、今は三人共に雇に出て一人も不レ居が故に家腐朽したり。依て漸今二件有りたり。

此辺黒百合、ハラテキ、延胡索多し。また蕎麦葉貝母を多く晒したり。

次に『蝦夷山海名産図会』(松浦 秋葉 1997) (以下、『図会』) に以下のような記述が見られる。

蕎麦葉貝母

カワユリ 京

シシカクレユリ 筑前

夷地惣而是を掘根を搗貯て喰

二当る也

簡素な記述ではある。図示したようにフシコベツとシレットコという離れた地域であり、年の違う記録であるので、比較には適さないが、日誌に記載されている以上、『図会』の記述の参考とされているのは、明白である。また、オオウバユリの本州での名前についての記述は、『丁巳日誌』のなかでも確認できる¹⁴。

ただし、「製し居り」「晒したり」といった簡略なものだけに、『図会』の例とは距離がある。これらの語がどういった工程を示しているかについては、即断を避けたい¹⁵。そのため処理を行っている点を指摘するのみに留めておくことにする。

IV おわりに

これまで見てきたように、採集時期や採集者等の情報については、比較的是っきりしている。その一方で、道具といったものや、採集の場所、その後の処理といったものは、あまりはっきりとした情報が得られない。これには、一定期間を居住しての記録ではない点が大きく影響しているだろう。

それでも、天塩上流や忠別を中心とした地では、採集者については女性中心であるものの、いくつかの例でみたように男性も参加す

る場合があることは確かである。また、採集に関して、海岸付近などから比べれば、「山」よりなものの、居住域近くではなく、ある程度離れた地域へ「丸小屋」を構えるなどして、長期の採集を行なっている。この点から、処理も同時に行なっているように思われる。

そして、採集期間については、6月最後半

から、7月、8月初めに採集記述が見られる(内田 1995 渡辺 et al. 1981-99 など)。これは、近代の伝承者の聞取りによって得られる情報と、あまり差はない。つまり採集時期については、近世末の安政四年のこれらの地域も近代においても、おおむねオオウバユリの成長に合わせた選定が行なわれるということができる。

-
- 1 31 件の他に、はっきりと人名や事実関係が確認できないものや単に地名の解説をしているものが 5 件ほど関連する記述が見られる。また『丁巳日誌』と対となる『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』には、はっきりしたものが 4 件と関係性の記述が曖昧なものが 3 件の合計 7 件が確認できる。さらに、七巻三十一丁に見られるチモケの記述については、その後のアイベツの記述を「みせる」ための文飾とともとれるので、1 件とは考えていない。
 - 2 『丁巳日誌』「第十二巻天之穂日誌 巻の三」p82 10 行目
 - 3 『丁巳日誌』「第十二巻天之穂日誌 巻の三」p82 11 行中段～12 行目
 - 4 ラフニは、『丁巳日誌』「第十二巻天之穂日誌 巻の三」p81 15 行目～p82 9 行目で家族と共に細かな紹介がなされている。

チノミ

(中略)

家主はエレンカクシ六十九才、妻エヌンベケレ五十八才、倅クウサンケ廿六才、嫁トサエビタ廿才、其子サヌレマツ五才、と妹ヲマンニ才と其に彼昨日逢しラフニ三

十九才、妻エトタン廿七才等合宿せし由。

またこのラフニは武四郎が周辺のコタンを訪れる事を知らせ回っており、武四郎の一行とこれより前にすれ違っている。

- 5 イコレについては、イコレフという書き方で、『丁巳日誌』「第十二巻天之穂日誌 巻の三」p80 2 行目～5 行目に以下のような記述が見られ、その出身がチルスシであることが伺われる。

チルスシ

(中略)

然るに此傍に又小屋一軒有しが、是はと問しかば、召連たるイコレフの家なるに、妻を去年持てるが、其より妻トワンラ十五才は雇に遣ひ置が故に共々一向山えは帰り不レ来と申したりけり。

ここで、同行しているアイヌの中で「イコレフ」という名に近いのはイコレのみである。多くの先人が指摘するように、同行しているアイヌの存在は、各家の動向を武四郎が知る上で重要な役割をしているといえる。

- 6 エシヨカンテはエシヨランテとも書かれるが、『丁巳日誌』「第十二巻天之穂日誌 巻の三」p76～p77 の 8 行目にアエルイカという元ナヨロの小使を務めてい

た老人の世話をしている旨が書かれている。

- 7 トキコサンは『丁巳日誌』「第十二卷天之穂日誌 卷の三」 p81 5 行目～12 行目までのベンケキユシビタラに以下のような記述が見られ、その出身である事がわかる。

ベンケキユシビタラ

左りの方ヒラ有。其下に一軒有。是即我が飯連シトキコサンの家なりとかや。家主はシトマレ六十一才、妻キトナンカ六十八才と甥トキコサン三十七才、嫁ハルイサン三十八才に娘タヘンカル十七才に子供シートル七才と、ハルイサンの娘二才に成る女の子と七人家内のよし。

- 8 比布川河口付近。『丁巳日誌』「第七卷再篙石狩日誌 卷の五」 p 321 11 行目～12 行中段
- 9 サケ子カ子については、現段階で女性か男性か判断できず、ここでは含めずに考察していく。
- 10 その程度にもよると考えられるが、病であるケシユランが同行しているのは多少奇妙ではある。ここでは、記述に従っておく。
- 11 著作のいたるところに見られるが、代表的なものとしては、注 14 の末尾のようなものが見られる。
- 12 クウチンコロの住居は『丁巳日誌』「第六卷再篙石狩日誌 卷の四」 p 269 10 行目～15 行目に書かれており、一部を紹介しておく。

フシコベ、ツ

右の方に有。むかし此処えへ、ツ川口切居る由。然るを今の処え改

まりし也。此処の西側則東の岸也に召連候乙名クウチンコロ家有。

- 13 この論文を読まれる方は、『丁巳日誌』『戌午日誌』を読まれていると思うので、あえて註を加える愚を許していただきたい。つまり、以下のように書かれている。

廿八日晴帰場所届け相仕舞、今日より筆を起し稿をぞ相始めけるが、是も後日しるべに今志るし置ことかくのごとし。

これは、『丁巳日誌』の最後の文章である。もちろん月が変わると、その旨が日付の下に示されるし、天候が書かれる。また、文末には其日の行程を書く場合もある。

- 14 これらの関係については、第五卷再篙石狩日誌 参の三十二丁五月二十六日（6月17日）に以下のような記述が見られる。

トレツフサラ子

大岩一ツの河岸に突出す。トレフは則蕎象山貝母、松前方言ウバユリと云。京都辺の山にてはガワユ

り、また一名鹿かくれ百合と云もの也。夷言是をトレフと云、山中婆爺の食料に大低是を当てるもの也。

『図会』の前半部分とほぼ共通しており、2つの史料の関係の深さがうかがわれる。

- 15 近代の聞き取りによる処理例を見てもその多様性は目を見張るものがある。その点から、注意を要する。また、近代の事例についても、いまだ検討は十分ではなく、悉皆的データのそろった状態で共通の資料からの研究なくしてはこの語を判断するのは無理というものだろう。

参考文献

※()内の年代は、復刻原本のもの。

内田祐一

1995 「オオウバユリからのデンプン採取の地方差について」『環オホーツク海文化のつどい報告書』49-64 No.2 1994 北の文化シンポジウム実行委員会

1996 「アイヌ民族におけるオオウバユリ鱗茎の保存処理工程の地方差について」『帯広百年記念館紀要』第14号 37-58 帯広百年記念館

2003 「帯広における開拓者とアイヌ民族」『歴史評論』No.639 2003年7月号 51-63 校倉書房 歴史科学協議会

肥塚貴正編奥並継校

1974(1882)『蝦夷風俗彙纂』458-459 北海道出版企画センター

塩崎美保 石井智美

2004 「アイヌ民族が伝承するオオウバユリとその保存食品の栄養分析」

『栄養学雑誌』第62巻5号 303-306
日本栄養改善学会

高木崇世芝

1984 「松浦武四郎制作の蝦夷地図(一)」
『松浦竹四郎研究会会誌』創刊号
5-14 松浦武四郎研究会

知里真志保

1993(1953) 「分類アイヌ語辞典 植物編」
『知里真志保著作集』p196~202
平凡社

萩中美枝

1973 「アイヌのオオウバユリ (turep)」
『民族学研究』第38巻2号「第26回日本人類学会日本民族学会連合大会発表抄録」181-182 日本民族学会

林善茂

1965 「アイヌの食生活」『北方文化研究報告書』第二十輯 1-33 北海道大学北方文化研究室

藤村久和 加藤篤美

1985 「オオウバユリの採取と利用」『北海道の研究』矢島睿編高倉新一郎監修第七巻 353-424 清文堂出版

本田優子

2001 「オオウバユリ加工における多様性の再検討」『北海道アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第7号 73-74 北海道立アイヌ民族文化研究センター

松浦武四郎著 秋葉実翻刻

1997 「蝦夷山海名産図会」『松浦武四郎選集 二』386-387 北海道出版企画センター

松浦武四郎著 高倉新一郎解説

1978 「解題」『竹四郎廻浦日記』上下
158-168 北海道出版企画センター
松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解
読

2001(1982)『丁巳東西蝦夷山川地理取調
日誌』上下 北海道出版企画セン
ター

1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』
上中下 同上

矢島睿

1991「北海道における冬期保存食の系譜
と変遷 (2) 冬期保存食及び保存方
法の形式

～厚岸国泰寺及び十勝晩成社の
冬期保存食～』『北海道開拓記念館
調査報告』第30号 141-154

山本愛子 坂西雅子

1983「ウバユリに関する研究—北海道の
食文化の一環として (第3報) —」
『天使女子短期大学研究業績集』
No.4 天使女子短期大学 19-26

渡辺仁 et al.

1983—1999『アイヌ無形民俗文化財調査
報告書』1—18 北海道教育委員会
及び北海道教育庁生涯生涯学習部
文化課